為士百首

契仲老人

へ 2
2255

桃三室門

富士百首

契仲老人詠

玉鉾百首

鈴屋大人詠

秋錦

鶴殿主作

へ2
2255

冨士百首

全

萬根

へ 利 2 2255

各分典籍詠歌二首

高□□

披書視古

於是仲法師よ子共にさをみせて云表ちけり
なをいさゝをあはれむこゝろさらにゆるしてあ
厚なさるゝ世の諸人衆共子あはれみける一
おもへるをくもさらにつくりて子持ちなけれ
みしきるつゝまれ子あへるゝなるゝもあ
れとゆきみ百年をゝえゆまゝともへ人に
世のなかつひまゝ僧ともはてゝたゝ子人をうらめ
はかしまゝあゝをまけしもなゝれもあし
てこゝをおもてをしひあゝあきさむまたゝに法師
なゝきさみとこそにあはれまさ人我もあなゝいのらひ

ちつねかきとゞめておかまほしくのみおもひおこしてなむ
いとあからさまなるめつらしきふみなれはこたひ
かの山の絵をそへてすりまきにものしてよに
ひろめはへらむ事をおもふあまりにつくりえたるなり
かくて此桜木は思ひしまゝならす法師もまた
ふみのおくにはこれをよしとも思ひて書しるし
さしおく
寛政のふた年の十月のころはひ
平春海

詠富士山百首和歌
桑門契沖
らちもなきやましたはなふくつるれ
たなひくふしのねの山
かみよりもなほこそしらねたかき
かしこきふしのねのやまのしらゆき
こゝにさくらをそてにうつしなほ
よそにみてこそたかくみえけれ
なかきよのゆきのふしのねは
なほさけしるゆきそあるらむ

なまてこそいりぬるかしのまは
楪屏をみるしかとしなかりけり
なるさまをみさるゝ故にしかりける
さらみえつゝみゆるめ御所なりしも
あおいもみおりゐのかるをまなかし
いまはにゑかれ候みしもとし
のはふしろきにいこあはれ
いみも御みとはしなり給ひ
めしの日わたりしけるもいへ
ませらむなら事　御きみなくもあ

せにしあはるゝ年やちいさやく
狭衣御みちをやちさまへしもあ
のまへにみくかみなとまかれかしかの
こよなくまつはまうしゆきし
時やいつかさうれしきなしきの
ならさまいしあかしみいかま
おほのはまかまをはかりしかるゝ
くさらみやしのきみなみなくし
なをもなくさみちいてありみ給ひ
もとなくまかてなかりけん故

そともかしの姫を待ちうけて
しはしこなたにたゆたひけるに
あかつきはいかにおもひかなるよの
ゆきゝのこゝろしらてかけける
ふしみのみ姫君のこゝろをいそいそと
いとまをこひてよりとあめのぬい
めくりあひをやかてまゐりきつるしのみ姫ハ
こゝろをみなとすゝみてかはしに
ありしの姫君もなかくなからむ山あひへお
ほかしめしてかたゆかむとおもふ

ありしの姫のあかときを宿して
なかうすみの夜はゆきさめのあかぬ
白山のくもりしよりしのふのしの姫君
そなたのおもかけゆかりてあかし
かしの姫君のかへきをなかちはしの山を
ゆきゝのこゝろはうちをゆめかへし
ぬしの姫をなかへいきこの姫君かき
ほかにさなかいまいもとゆきて
なかりしもの水にかなそうしなしの山の
みちをへかめはなかなふてかくる

かしは桜のちらしとをもしめ大かたいも
こころをたてひとつのあはれとなり
ひとちりはゆきけのおはきいともそ
へりつひらくかりはみなこえ桜を
若ゆくてあさ色して行えを
かしの花をのはるそおもえてゆる
ふるさとは桜子き紐かへりてふるとき
めつらしけれはめでたきには
せはひともはるくれる後の春
うらさくらはかりみなとそすかた

みよしの山神はまつるふもとには
はなつくしやかけはなききは
尾上のひともはおいさあくるめさけはの
あはれもかけはしまさぬも
またゆくしき雲のかけるおほるあ
わすれかけは桜はなしはつきてし
ふしの桜はすまふくてさくら
けつりき山はみそえとまため
あさつちはさくらさえのうらも
かしのあをろ桜のゆきさみたはれぬ

あそこにハ山のふところ風もふかぬ所の
ありさまハなかなかおもひやられはへりし
ひとりハおいとしお山へまいりし様と
めしのしたくをいたしてまちしかとも
つねおやさまハつねつねさけてまいらるゝは
たのしみにさけおのみしもしらしん
やしなひあまのさけにたのしみを
なけきかなしみてなけきくらしも
なきとおもひしにぬまおほかり様子
はなしまいらせおはしまさむ
つねおやさまハかたなにはなさかなかへりの
たのみおほせにてまいらるゝにも
なみだおさへ山のふもとのたにかけれ
かなしみあまりおやさまハかひそへ
なきおやさまのおもかけおもひそへ
なまなかしのきのほかいたちものかけ
かしお様おそらくなしけやまひもの
よしなきこと語ていきかへしいまこそ
あるとおもひあそはしかしお様候さまへ
のほりやまそのふもとにまします

かくてのこりしみなくしうとましく
梢のいたはしけのこしをとめなをも
かくけるをもきこゆしまうて
きこしめしけるにもいとゝ
なをみ梢もかくていとくあはれなり
御つれなさやいまさらにしのひかね
たゝここのあはれもこゝろやうにそおほしける
みしかき夜もほとなくあけて
峰の月をかたふきては ゆくへ
なをしもなをとてくゆるなか

あかつきの神のちかしぬ の梢を
梢もちてふかくかたりあはれ
くもきよあたなけもたちまち
のにたまふなしなとあはれ
さひしきなる心やすく 子
なみにやるなふ しはなれまも
あはれものもあはれし 御心梢を
うちよみにほとりなるきし
まつあひとのこゝろみ の梢
ゆきかのうしみなしあとけれ

いつくしきありさまなるらし一の君に
おもみしらしやとおもふらむ
かのおほきみの中将のつきほつら
うちやうらしくのけらし
故宮の御まへへしもまゐりけるや
かしのうへの君ありのまつはしもなく
あやしうおもふ事もありけれはいとゞしく
たゝこのみやうらはしくの宮の君
おはしますおほくさきおほえて
あはれなるゝをはかりとかしこ

おほかたにもありかたき御事に
今しはらし御やとさまも
あはれなる事をもちこちくのいはし
ゆかしきまゝかりのしるやま
あはれなるのほとひとそちのは
かしこのこの君のくまゝやうに
月たゝのひとつをはくらひとくたの
めしかしこまりかくらひあつめて
みかとはたゝみ御おほえのかしの君
あはれなるちかくやうにまゐらせし

ふしもの梅はなさかりはあけれはやしほそ
あさおきてちゑひさしやまとん
咲しの梅ゐるゝはこゝしたまくら
あかおかり人のくれおはゝるき
たつねみしやしらそしみちくて山
なさしたちもあつしめてまし山
またしゝもゝふかとしひとなさし
みちふくさしてつしのしもしま山
なかしおしらしてしとかしゝ梅
大ゝしの梅しよて哉

こゝもてこたのとはみゝしいつのまき
ならゐつれしあゐやしやそ風所
またなしあまのなこほたちおふ
けみりそたすとのはこふのむ
御中まみ梅のもしゝ雲をれ八
梅やえしも花ゝとしもそあれ
山くれのけふしみこしゝも吹ゝ
名ともはなきたことまゝゐのむ
こゝ倒しかしふのむみちまつれ
あたちりひちみあほゝあてし山なき

ふみやしらねのこのもとをかけ川の桜の
はなのあたりを入りえやとこそある
ゆふたちのすゑのなかれにある子し花そ
いさおちに桜ちらする中まくらふる
おほみやにさかりつきぬあえぬものひとくも
はなのことに桜さそふ人や花ぞさくらぬ
ぬるかみ桜のいろみかさ清すかなしさ
あらしふくよのひとつのほすゑかしし
ひさかたのあまのかはらにすみ神代を
ときはすやいつこなかしのしつみ山
かけの桜をあまたあけ付てきさらぎの
かすみたゝれてさえたつゆふるる
ことゝみえしは花の色ちれははふきかな
かつらきや桜のゆきまぞしのよし
野のみね桜そえしたかやさしみあゐる
うらはるまのきしをまちても
ふし川のたえまなく氷川まへり
ことはりあまりに雪みぬめり桜は
ぬしの桜のすかたのみこそはなと見え
まよのくまなくふかきよしありけり

雲ゐ山ひとのくすゑ母きこえ給ひし
わかれの時そたつねふみたれ
をとゝしころふしのしこや雲のたつね
あかおほせられしまかりよせ給ふし
ふしの時そとゝめおかせしひつきて
なかれぬ雲ゐにあとをみふる侍し
去年の時もなくあつ瀧のさをりなるまゝ
かゝることまて小雲ゐさへつかさ母
かしこき時もとゝめ雲ゐ山ひとの
しかあるくさらのしるしそみゆる

ふるさとへたちかへりおもふ人の時と
みくれなるをしつるれなりける
そこおほあかあのそとあこのしろ天
りくみしみふかみしこ雲
天まの道女なるとりわれてそまかる
かしのうち時まかこそ給ひてけり
くれなゐの雲ゐにふかめまかの時
とほ山くみよりいてぬれしも
かの時ふちかなあなそやまくら
もるまのかりけるなかくゆたえ

あきあさくらにくものなかれまて
うきくもはゆふしらぬよのつきの
たゝすみてきけはそやこの
あひみてしよしのゝしもふ
なきこのはしくれみやまあちる
ゝゝけさしくれやふりの秋
庭はつきいろ紅やふしの秋
ちりてかゝるのちるもみち
あきかせのふくまゝにふしの秋の
ゆきまゝのよそのかをきける

そこらしのひつけする山のあらし嵐
みよりしけなかるよしそあるらん

此ことはなしもえつゝのさかりおもふなれは柱をたちてまたえ
とおもひはてもあまりとしをふかくみすくいへまてもふかう
ところあまたある村田の人々のみえてくれし そか
つよみたまへるてたひ下界をそけ見えとなま
なきに絵一ひとなつ花あまたをみなまかりなかるか
物はけりとありて何なるさまにみえはてしめ
さとへのたとしもまとまの路のみやひなるまま
そのまゝやかたちにおもくはなのけまてしみちに
さて松にさきのたまひしみ霞にてなまきはしめてる

とほくきこえて世にひろくあまねし私にも
にハ見ならひをおもひしよりことひハさくら
人せちに定家卿の手ならしゝすゑ家のを
しるしとてあつめおき給ふ藪のまたに
のこしめたるそのみちのあとをおとしとく
かしこ月をそなへしむかしをはしめしま
ちるひかりのしるし也

寛政十一年三月　源鯤弦

子名波牟比賣麻和加袁婆豆生麻世流兒

若野毛二俣王母弟息長麻和加中比賣

尓婆豆生波世兒

玉鉾百首　完

葛根

玉鉾百首

味きなきそらに門乃是布天地よりて定まれる日乃大清神

天地乃きはみ照す高ひかる日の大神そたふとき道

高み座天ゆ嗣し日の御子の千乃宇気伝へ来る道そ此道

天の下青人草乃安きを比ゝ清み恵る於ゝ道

二柱は神乃神て玉鉾乃並乃木の道は多くの事

天乃下国もとりし神ろきに宇まさ賜ませる大八嶋国

日の神乃まし清国して寿し百八十日乃保国杵門

百国乃まつりに保し大御吾大君のまにまに志しても国

於しては皇統国を宇内一国安の主なる事に於て東国
自ら中乃国なれば日の本乃大御国の傳はれる国なれ
天地のはじめ乃ときより日本ははやく国中にすぐれたる国あるや
大穴牟遅少名毘古那神乃より国造りまして大八嶋の
まつはるか常世にわたりて韓国にも少名毘古那の造けむ
都の事なかはもぬ計りに秋津鳴島大君の御代をまもりして
国乃居ひとのはなし真実の日乃御子の御代となれ
天照大御神乃天乃下をしろしめす国なるに國中まつ
もろもろの漢乃国人日の神の光ありとしらでいとへ
世かしこき言葉をまなび漢国にいふなる神乃照国内を
皇統乃道まで称する言をへて唐国人をまかしてしるされ
天竺まても日乃大神乃道をおきてしもはさらにまた世人
明らかにも日乃大神の御心まで漢意さかしらにまどはされ
外国をも神代にもすぐれたるにまさりたる道をしられ有せ
なほく不待をあはれしぬのたまはずことをもつけり
上代にのみ残りし神はたる古事ふみをわすれたる日乃鏡
かのいさかいかでまつり味はしへたる傳法書乃まにまにせぬ
神乃代のありのまゝに傳へまつれる武法書乃尊
まさ鏡のごとくと思ひてかくしの塵るるなり磨（トギ）てしけむ
まづへとし醜（シコ）乃よみのありてまたかはらぬ人のたまはれし

をうしに神代の伝説をきゝよみて漢乃心になれるが悲しさ
漢ごゝろなるしおもへてふしぎにも人みなとも、かくさはわろくなる
唐心おもかりし人達て大直毘神おもちいをこそにくみなれ
伊邪乃命の御身に清まるを得てもと唐のまなびにうつりたるも
久方の天津日の影をしらす漢乃心にまよひしはじめ
漢書のさきにうつりしへ人の神のみよきの乱となれは
下にたいする漢書川もしたなるおもひしなきいしてあらはすもの
きゝもせず心をうしなひて中に唐の教にて人ありしをしる
其名をしる日の神の人学の人々にてあやまりおもへひろし
からぶるさはかのさかしら心をつけて世の人の心悪くなりぬる

日本本国の傳をおきて外国にむかふ心ともなりにける
言葉もみな国なるもあやしきまゝなる言葉となりたる言葉とは
禍津日は世乃人の耳にふれたるも真実ならずは聞人の心に
あやしきまことなりて化字へふかし神代ことにあやしかなしむ
さて由へきいおもふにしたは世中乃名をはしきこととし神なれ
さてしらにたえなりのさるにありし世乃さかしらは底ひなき物
名をはきこえたるさしたまひて漢人乃物のうつりかはりけふさき
あやしきことあやしにも世間のあやしきさかなる心に
さかしけし人みなさりにかきりあるに神代さいせそけるも
人ならぬ物のうらおもひしに思いはかりて心と漢より

世之為の事を委しく知り得ぬ事は言てもあとも
世乃中乃有様いはゞ何事も神代の事を尋ね知る由
なりけりつらくも神もさしも身の神の御しわざ
あはれみのたまふ君神の事は大国主の神のしらせ
国にて見えぬ神乃心のまゝなる事のしわざ
あやしき事もありける ことしも禍神乃心乃まゝなる事有
大かたよのなかにいふ禍事有 吉事の大まかの道
世間はよくてもあしき中にもよき事の
あしけれどもよき事もあり 吉凶神乃心にて
百不足八十禍津日の禍事も吉事も よき人もあしき
よき人をもなきものとする禍津日の神の心を得たる人をも
天照大御神も千早振神乃心をさへかしこみ
おほけなき人の仰にも神のみ力を禍神をあらはし
あやしきなき何かとうつくしみたまへ
いまはよしあしをかしこみ霊なる神の
去年上つ代の事は神の人につき
神をも見えむ有
此やけしつらく龍乃
さればこそ神にしあれ其道を直して神の道
此の道へき神たちおきて日の本の神を人

よろつの百の木草も天照らす大神の恵みによりて十分に
朝夕に及ぶしも豊宇気の神の恵みにおよふ人
天地の神の恵みを受けしものなれは一日一夜も怠らて
八雲立出雲の神を以て思ふに大国主を人と申せしや
以てあかめしたひまつるへき物住家の君の恵みしる神恵みし給ふ
天照神の御末の氏も徒らに氏の名をおもひつゝ恵みなりて
物造る民も法を守りて造るものはいかなるも民なりしも
皇神の恵み受けし人草も世の中の人悪（悪）しくもなくまた国
世におはしますかみ代に祖宗己が氏神己が家
父母も我家神我神にて心つくしてはやし人の子
めくみ草にも及はゝやつかれの皇神のさつけし宝とおもひ
わかれし時の[illegible]に[illegible]神の真の道をも
わかしのはなり神の時の法言なしあれは[illegible]
おのれよき人に恵みをうけて行く[illegible]
安口にあれきもとうれ撫て安らかにてあれは[illegible]
わかこゝにみなかしきくの時治まれる代を[illegible]
ちかくにきし神にはきこゆる法をしれ飽まて[illegible]
しかしあかねふしうとうこし人をしめ心
ことこゝに人をよい心をしれはひてなかなか人の心
まい心をはかしきつゝていかなるこのかよ唐の

漢人のまさきなしひてこゝろいたつらなる心なるしや
なほきはる二世と申すものゝ身を以てさかしまに死なむ
うつしし是みなあやしくさかしまの説あしく
きしみ國よりの口まてもいふこゝろ千代とをしのまもれ
千早振神の心をなこし給ひしけの禍わかみのこと
家と身と口とけかるゝなれは神のめてたまはしきつかを
竈の火のけかれもしくは家内をけかしけかれは禍おこる物
けかれをしき深くなれるはきゆる人をくるしめさせ
あるへしたゝよくつゝしめは禍もそれ諸々の禍わたらるゝなかるへけれ
世の人のあまねく清き川にすみならへし早秋津姫に

末とけてそのしき世をはふく月の神いまもかせれ

阿麻理歌

おのつから心におもひてそのかしらのけくらし
おのか心の道をもちてなきしあ言靈のさきはけるまさしく
百敷にとらあてまあれし千早振神の心にいかへまし
しかしよゝまてとすたるの清靈つけし鏡を伊勢の大神
ひむかしの國つもしけてはつるれを衆國の宮にまつれ
久方のてらの扉の法うちて清もしさかしあやまち
なほ道の宮のたよ代と天地の神をひてまさくけり
先そやくなすつ國を言ひける神のさとしをなしと流る

古事記といふ書はむかしよりつたへきこし文字にて皇国のひらけたる
さまをしるしたる蘇我のおほおみ天地のはじめへのことをかきあつめたる
くまありし家をまたたえずさかりしくのちはあまりこ
馬子のうまこがむすこにかくれ得てつぎきまりて恥くやしを
わすれのちおきくいでかへりけむ君がゆるまつりごちなや
鎌足が子の中大兄の皇子をむかへて君がいまをせりける
たきのゆきこもりたまふていでまし御心君はなほこしめする
おほみことのりふかき聞召し志ろしを奇き髪さしかざしそ
鎌足が子藤原といふのちはさかえ家おほくなりしや
大王をまもりみそなはしなのみことを秘げぐるしてまもりさまし

禍津日の神のさきはへしより世の人しをあらためおほきしこと
ともしてありしかど鎌倉の平子のちは国のはたらきひたすらに
おほしける皇国をわすれしまろうもの唐のことのみをまなびけり
可畏哉皇みくにはいちはひてまやかなり多年足利
いまにも神のおほひをまもるの山科に君そ御ひかり
漢国をしたひて足利がたのみし臣御国を
天下をつかさどれ足利の家のならはし世をうし
いかにしても久方の天皇をばしたてまつりしこと
志ろしめす織田命はみをかへりみずもとよりたよりせし太臣
まつりごちいひけむ朝廷をあがめまつる豊国神

豊国の神の御いつハさかゆくのよろこひをおもちまてふかて
東照の御神ふかくして 天皇以年をへて御印るハ
安御代し君の大御代をもおほ神の命をミちひきかへる
東照の神の命ハ安国と

きみをえらひたまひし 御世ハよろつ代

右弘化二巳年長月廿三日写之高須葛根

秋のなしき

[illegible]

あらひまのや侍もの玉も人は世となりても猶いかしへ
のさ侍なりうるに作りの繁るるにあらひしとびまかりゐ日は御
のあれいで給ひしより民忠んやうくきあがしうかくさ
きほんをさへ雲の上にまうかし給りしぞいと悲しとも
かなしくなむさればなつらは人と世をうりいで来てんを
名ぶけと彼御の作んをなごしわひ作年給ふりるをいゑ
よ皇二百年あまりは古へより玉ろし第二葉のうやありな
づまのまに御御のいと悠揚さく絶えの君もいとよういつ
うらみあらきのへぞあまりの年月民はん意やよあ掛巻も
かしこき皇みかどの御んすもおもてにおもなく久すなし
なみだいと類ひなき御代なりりの中ましき先の君世をあ
づうきをのびて四十年あまりあまり給へどいみじへも

かく久しき例はすくなかなるとうへには人もいと
うれしうおもほしけるになしもむかしは十年と云る
も則闕とかいひけむばかりの官さへつけ給ひ西の殿の
君も内のおとゞにて給ふかぎりをのぼらせ給ふをさへに
ならひとつの位まで給はせのぼれるよりして十年
ばかりの世を給さきなひてはよはひも六十をこえ給ひ
みければ今は西の殿にゆづりて給はひるさをおぼしくやさせ
給へどうちわたりもゆるしゆえぬはいとゞ人ともをしみけゆれ
どおほしさだむることなれど今はゆるさせ給はざりし天保
八年卯月の二日といふ日に西の殿の君をば今まで位を
のがれつるをうけ給へとしみけれてやがて西の
殿にゆづりをせ給ひみかりの時ともさいつかいかなししかつ

きこえ給ひしをかへる春まではといふものの二つもと
をとうでさせ給ひてゆづりのことし家和泉守乗寛して（御老中）（松平）
やさせたまふをきこしめし給ひていろいろ給ひてすゝけはたん
まかりのはらはけ出て此ほどの二葉山の御弥生代と
給ふへきを給へるにはゝかせたまふさまあるもゆづりをゆえ
さな給ひさてこそのよしなうちに蔘をさゝ給ひてとれも
なしと給ふにけんなしあはぬるにおもほしながらふかく
えとらぬあへかはでそのなさをのあきらく今の君をも
さてのたまし将軍の職をなさきのひまさきの君いと久し
うつかうまつりきゝ給ひしはいきとふよりていまは君をな
左のおとゞにうつし給ひはうまこの大納言の君をさへ
大将うけさせ給ひなむとて秋のゝしは使ありておとゞうち

二とせさへかゝり給ふよしけえはれもあら
ずなれ此御んなららひよてまいらする色の御いとの日二
所にて（細川）能登守利（熊本新田）用殿の御使かし（堀）丹波守直央（越後村松）大宮の御使
又も（池田）信濃守政言（岡山新田）堆府の八代（木下）濃守忠徳（播州赤穂）二條（従一位斉信公）の左のおとゞ
より八（松浦）肥前守照（肥前平戸）近衛（従一位）の内（忠熙公）のおとゞまた修理大夫祐相（伊東　日向飫肥）御旅
所の御あるじ給ふをまれなりといと古傳やゝこのたゝひ
つけて又御使のさいつらみるへき所くまいとまづゆき
し恒例ときに給ふかく御まうけの日あなたとし又日もたらぬ
其この事につき内の御使官給ひくあまた下り
つき給ひてさて宣旨つたへのいらむハ長月二日とある
らかし究定給ひぬ其日よ事なりれと御ままてい
つ冬もみかりあけてもやましいと青やかなるこすゑ

あらくしてうしやくもゝのかなる御たゝいひたる雲のしたふ
もさうりておしとましく見ひ人とまり御ほりて御ゝかひ
のうちくしまゐりめぐ君を黒き様のうへのきぬかうき
もんの御はしの備け衣をきのうちかさねきるけしう
あまたうせさをうけ給ひて蔵人の御ものし蔵の石をいと長
う引給ひて出させたまひぬる大納言の君よりも得ぶいと若
うおはしませばあれしうへのきぬをうき紋の御はしの備
にほふのうらうべいとしきひぬうきせる御下襲を
あるまさまる二所ならび出させたまへる御さ備を先もあや
ふうれわ公をまうて慶（紀伊）順大納言殿慶（尾張）温大納言殿慶（田安）荘中納言殿
昭（水戸）中納言殿慶（清水）温宰相殿（一橋）よし備きの中将殿といつれもおかし
ほどの御さ備ましておゝ勝き出てのふ中の殿ふとくらなれ

ひてまつる。倉橋侍従（正四位下永胤朝臣）、土御門の二位（従二位陰陽頭清親卿）さへしいづおほく
うへのおほせまつりて入めれもいづくにもさ侍りける
清きうつはに清めて先の君をはふりの御ゆか（御紋雲立涌）にあふ
ひ奉る儀つかふまつる侍りけるほとさしめるをふかくしめてしみ
しらおくれて清りきよめ帳台に入まゐらせての御おもてと
つくれるをなん中の御へる。その公卿達は西の廂に南向に
おはしまへり。それより下に宰相（加賀）中将、越後（松平三河守）の中将、
民部（松平）大輔、典薬（松平石州浜田）大夫、左近（松平）大夫、上総（香寧男）介、良（松平）左京亮（播州明石）、直良（？）
備前（松平因州鳥取）守、訓（松平阿波守斉昌男）誠、右（斉典男）大輔、宮（直諒男）内大輔、宮内少輔（松平）
て、あれしひきしのはしのうつくしきにむかひて讃岐（松平讃州高松）少将（従四位下頼胤朝臣）、
土佐（松平）中将（越前、紀州、奈良）、右（頼恕男）京大夫、刑部大輔（井伊中将直亮男）、直元、雅楽（酒井）頭、大学（小笠原）
照、大夫（豊前小倉）、太田（酒井）右京大夫、上総（松平）介、右京亮、式部（松平）、定数、近江

守定和（定長男）、式部大輔、大夫（忠堯男）なども並みゐてありけるとぞ。また（若年寄）
侍の御かた（御小性）いみじくおほえ給へるものの人々にはおまへにて侍りける
給ひもえよりは御とふる給へる　あ
はれなるかなしみはこめてもやの雨の二の宮の宮には
四位五位ともあまたつかふまつりてそれぞれ侍りて先
立ちれ御使（正二位資堅卿）ある大納言日野（正二位資愛卿）大納言、院の御使（正二位實久卿）
中納言大宮の御つかひ姉小路（正三位公遂卿）中納言、准后の御使石井（正三位）大
納言なりまゐりて君の御まへにまうけたる中の宮の
たのみに皆いきて大監物（従五位上山科正恒）あけのへのきぬ
になしてひとへにはしらおりて神の上にあかみいで
たまひてみなかみたえんのかしこきまで恐れおほく
おほはしてこの御前に常にちかきまで恐れおほくそ

すゝまゐらせ給ふよしなふこゝろばかりいとゞみへて
あゆみ入りぬれどこゝにはりふみある覧宮よりわかれて刑部（正六位下三宅行邦）
少丞御車よせの侍ともおもたく大史（正四位下壬生以寧宿祢）とりて御まへの
ひさしおもてに出られて弾正大弼義園（高家従四位上少将宮原）とりて御前にまいらん
ぎられ君にかしづきてやゞてうへしぞへて河内守（若年寄）正寧（増山）朝臣
のつらに持ける笠はこれ大納言のひさしに持出られを侍
おまへ雅（寺社奉行 牧野）とりてさきむかふといはれて御前の床にもていで
給ひめて史に給へもおしいたゞきていりぬひぐりに
らいし給はんとちかのつらきれ中務少輔（正六位下青木行誠）の御車寄に
もていのれどおもゝびれ大和守（従四位下押小路師徳朝臣）御前のひさしにもて
きゝつゝと大膳大夫（高家従四位下武田）信典御らちあざまれなれもおろしさ侍
りそりみてさきむかはゝるをば因幡守（寺社奉行 青山）忠裕してたまふ

さ日大納言の君大将にけさなか給へどもおのれしさ侍にそぞ
なれるさるとも見えられて内よりは御はしのもとにあまそ
へそりふみ御いもひふえてまゐりきかひけるをいぼえ
ちの大納言は御前にもちてまゐり給ふ君としつさどうき
ぬひておまぬ給へど院をはしめ御つゞくよそまゐりてを
給へるものをば御位の上達部つらく持出たまはいらせの
らもさうばかのなどさまな給ひて御ふらふよすりさな
給ふなべてゐ給ひぬ人々ともみさゝらを姫君おしりなる
内侍の句ならど皆御使してみゆくの床まゐらをたまふ
ちかふなる頃おとゞなる二所もさな給ひてたゆえしぬ
小将を給ふとりまる君は中の宮にあいりもさなたまふ
それはもておし人々をみなしくらていとく見えてみしさりて

いまさかりし栄にかくしまへにさがの君へにほひぬるに
さしつきて今の君も大将のきこえありてうけたまはりしと
色からうしめ給へる御さちともになむきこしめしうち
めでつゞくる人ゝをきゝておもひけらくちかしこくて
きぬといへとしも下ごとは衣ふさまられなれは目もしられ
人ゝもおほかたもめでたしきこえしつれとうへの衣をいはいと
よしきこえれ人もあらざるをめでたくおほせあるかしこうは
なふうけたまはりつゝうらやみいとあらはしさしていたらく
うらやみさしけるなしてさらくとおゆみうちときたまへるにも
えんりてはえんのひらくとおひらめるてよろしきれた冠
もちあつかふあやうけなるもあまたされどやさしく
いかそくの人ゝいて来たまふをけにそみやれをもちあむ

人はなれにかゝりてこれ公達はさらなりなれ殿なくていや
ちかうてなまめきいつきされる越前守（御老中 水野）忠邦のめしをうけて風流
すきて人のえらびにかなひたるもあらんかし大かたのさ
しきの殿のさまなるあつかひもかはらずいとをか
しげなる君が御代をことほきてうちなでしをちれひらをふ
おかしき事あけて給はる給へるをいといと
ふかさまさりてしきりたまひあさゆふ人ゝもさらに左近者折
菜のくさのかたちのみなれ人ゝをも和歌の宗家めし内匠（御留守居）
頭宗譲（松平）なる人に宗譲をまつのいづるをめでたきひろ
形かしらよりかゝりてあるひまに太膳大夫大国めし中務大（御老中）
輔（脇坂）おほせめし肥後守（若年寄）忠英（林）めし能登守（西丸御留守居 中根）忠映はおかしう読み
ちかききひらく人々をうちなみたゞりける甲斐守信侯（奥州盛岡南部信濃守信濟男）をなつく

いとわかくしてみまかりぬるに其跡のかはりを上総介
なしめし上総介（有馬玄蕃頭頼徳男）所領めし対馬守（松平土佐守豊資男）に仰めしつかはしを
とかむ大膳大夫（元利）むすめのさいはひたるかはりをまかせ
なりけるとて頼祥之中将のものをたまはりしよしむかへける
ところまうして赤羽中将之伝知をつけのひぬ何よる勝助を
左京亮にめしておはしたる事なりけり四位の人にあま
されるなかにかゞの中将を宰相にかけられその公達の位
うつくしくもおとなしまじきばかりのほどにちかき御ほどの
人にはいかでおもふなんかしはせん五位の人となりにまかり
しへのきぬの色なむさだめなりけるといひてふといふ紋
を近習などのくだりにてみえたりかの御かほ見あげ
ちかくびをあまたしたりける大ぶりのかもてなしのさくな

どいさくうちんえらびを撰あまたの名を出ぬれどさかしみを
とてなむかのふるきとりのかたかどもえらびとなりし仮使
のうちむぶんめ微上人にめでたしとはよのことひて
むかし出むをふかくさだめおしけれどあまたさふれどいとめ
づらかなるは史に記すまでぞみえける廿二人をうしろを帯
をあらはし禰たらられて其のさきをばいとみしかるたくらい
れるさる箇条をぬけるをあらむるてありける
おもひしく史のうちに書くはのなかさまでみえける
刑アれなる中勢のなかなるも仰しさ備にそなはるきを
附さるとだきもえしされどそれほど遠くてふんまかりて
よろえ済かなるはなかまでもめしもあやなるけしきじも
まていとくさらしまねらん事なりけり

栄えゆく御代にあひ侍るならふる秋の錦をかさねん
つらね那にみれ給ふもあらぬもの成らは更に近う侍るま
こまかくなげくさま侍るほうどもと見まゐらせ侍るまく
さらしきるどもをとさへ見もしけれしつらきけはらあるを
この波にまかふあくといふ言く秋ある侍る中にしてかくし
も古承たらは元よて人にみれべくもあらぬ君るうまこ
と仰へき言をむすびもあらぬかく見て為き御代に生ふれを
難きるともふおぬるをむふしく見於むかは惜さふ言の
葉のつくるきをもえいとまでしまであるのまくりもめし
給るふうりうへれく侍りてちるのうまにいさるに
急ぎふれとこめをとのいみじきにいよくうれかくらう
君も又天の御代にかけらましまみさやの代ろさうえ

いろなと

是ハ此小納戸といふ見の下野殿家乃書つとハ云る
人のあつらへにうつしまて后京極殿の筆とのみへ
たゝ字かへえてうつし呈ぬ

文化二乙丑年長月廿八日　恒廣

嘉永六丑年魁秋廿有八　萬根

御久志登吾思布妹我衣有婆自
敷与曾比玉耶良婆年尔巻上
正吾思布妹我衣有者身
与曾比玉有婆手尔巻持